



### 和太鼓部 全国高等学校総合文化祭 (宮城大会) で優良賞受賞

和太鼓部 名誉顧問

3年前に全国優勝を果たした和太鼓部は、翌年は大阪2位に留まり、全国大会に出場できず、昨年は再度復活し、全国大会出場で「A評価(全国10位以内)」を得たものの惜しくも入賞には届きませんでした。そこで、今年はや早い時期から準備を進め、演技内容もバージョンアップし、三年ぶりに上位入賞の「優良賞」(全国3位タイ)を受賞し、雪辱を果たしました。これで14回出場中4回、上位入賞したことになり、日本屈指の高校和太鼓チームになりました。



全国高等学校総合文化祭の出場校は大部分が過去に優勝や上位入賞した常連校で、年々ハイレベルの闘いが展開され、どこが入賞してもおかしくない状況です。特に和太鼓部が出場する郷土芸能部門では、全国高文連と文化庁の共催のため、近年は和太鼓の演技内容に「郷土色」や「地

域の伝統性」が求められる傾向があり、高度経済成長期に発展した振興住宅都市である高槻・茨木出身の部員たちにとっては、もともと苦戦を強いられる事情があります。

本校和太鼓部の演目「咲くやこの花」は大坂代表校として岸和田の「だんじり祭」をテーマにはしていますが、部員たちにはなじみの薄い祭りでも、どうしても抽象的に描くことになり、郷土の誇りとしての実感が持てません。2位入賞した愛知県の松蔭高は部員自身が参加している地元の伝統的な祭りのカラフルな太鼓と提灯を持ち込んで、「地元」の強みを発揮していました。

さらに他校は選抜でベストメンバーを絞り込み、ステージに最適な20数人を配置して勝負に出ています。本校は選抜無しの「全員太鼓」が伝統です。今回も2・3年生の45名全員が出場し、ギリギリのスペースで演技するため、全員が一丸となつて綺麗に動きを揃え、他校にはマネのできないハイレベルの演奏技術を駆使することが必須でした。

そうしたハンディを乗り越えての今回の「優良賞」受賞は高く評価され、本校和太鼓部の歴史に名を刻む栄誉でした。部員たちは優勝を目指していただけに落胆もあつたと思いますが、全国数百もある和太鼓部の頂点に名を刻んだことの価値の重さを感じ、誇りを持って活動して欲しいと思います。

### 和太鼓部 全国大会後に被災地訪問

和太鼓部 (前) 部長

私たち和太鼓部は、全国大会終了後、東日本



大震災で津波被害が大きかった宮城県名取市に残り、被災地での訪問交流を行いました。名取は和太鼓部の先輩たちも震災の年と翌年の2回、現地を訪問した場所ということで、和太鼓部のことを知っている方も多く、とても歓迎して頂きました。今回の目的としては、東日本大震災で起こったことを私たちが知り、そしてそれを多くの人に伝えていくことです。



私は実行委員長として、この機会を部員にとつて成果のあるものにしたと思います。美田園第一仮設住宅の自治会長さん、関上(ゆりあげ)太鼓保存会の代表の方と積極的に交渉して、仮設の住民の方々や現地の太鼓サークルとの交流を計画しました。

美田園第一仮設住宅への訪問では、私達に出来ることで喜んでいただけるとは何か、また、今何が困っているのかを自治会長さんと打ち合わせしながら進めました。交流のためのチラシも作成して送り、配布してもらいました。現地の関上(ゆりあげ)太鼓保存会とは合同演奏の相談や、演奏会のスケジュールを調整しました。関上太鼓保存会は、復興支援活動に力を入れているので、和太鼓を通して私達も復興支援に協力し、盛り上げていくことが出来たらいいなと思っていました。

美田園第一仮設住宅は広大な敷地で、震災から7年目に入つて住民の多くは新しい集合住宅に移転し始めており、現在は3分の1の60戸ほどが入居している状態です。部員全員で敷地内の草取りをしました。1時間半ほどで大きなゴミ袋30袋くらいの草を取りました。

草取りをしていると、顔を出すお年寄りや子どもたちもいて、それぞれにお話をしながらの作業になりました。私は仮設住宅に住む小学生

の姉弟と親しくなりました。一緒に遊びました。

夕方から唄を歌ったり、和太鼓演奏をしたりとても楽しい時間を過ごしました。私はその交流で知り合った仮設住宅に住むおばあちゃんや、文通をしています。この繋がりを大切にしたいと思っています。

関上太鼓保存会との合同演奏会では、私たちのアンコール曲の『彩』をコラボしました。ぶっつけ本番でしたが、とても楽しく演奏出来ました。また、関上太鼓が出演した老人ホームの夏祭りでも急遽、特別出演をすることになって、関上太鼓のメンバーとも親しくなりました。曲目の表現の仕方とも違つてとても刺激になりました。

仮設住宅でも関上太鼓でも多くの方々が、大切な家族や仲間を津波によって失っていました。除草の後、仮設住宅の集会所で私達が話しながら休憩しているとき、自治会長さんが「私も高校の空手部で頑張っていた息子を津波で失くしました。みなさんの楽しそうな姿をみて息子を思い出しました。命を大切にしたい。欲しい。」と言われた言葉が忘れられません。自然災害が起きたとき、生きていなければ、誰かを助けることも、その教訓を伝えることもできません。現地で学んだこと、見たことを私達は多くの人に伝えていきたいと思っています。

